

教師に求められる英語力、指導力、教育力

The English Proficiency, Teaching Ability, and Educative Power of Teachers

亜細亜大学国際関係学部 特任教授 佐藤 玲子

1 はじめに

英語教師になくてはならない力とは何か。考えていかなければならないものとして、英語力と指導力があげられる。この力の育成については、2016 年春に文部科学省からの委託研究として東京学芸大学が調査を行い、2016 年春に発表した「コア・カリキュラム」（東京学芸大学，2016）の中でもそのための教員養成や研修内容が提案されている。しかしながら、同じカリキュラム、同じ単元計画、同じ指導案で授業を行っても、教師と児童が違っていると、その授業の様子は異なったものになる。生徒が目を見せながら生き生きと学習している授業には、指導する教師のどのような力が不可欠なのであろうか。

「授業が一番下手な教師は大学の先生です。次に下手なのは高校の先生で、そして、中学校の先生、小学校の先生の順番です。」（仲島，2006，p. 123）と言われる。本研究では、授業力を研究授業で常に鍛えられ、また、外国語活動が必修となり英語を指導せざるを得なくなった小学校教師に焦点を当てた調査から、英語教師に求められている力を考察する。

2 研究の目的

コミュニケーション能力の素地を培うことばかりでなく、そのための基礎的な英語力の養成が求められている教育現場で、学習効果が望める英語教育を担う教員が身につけなければならない力は具体的にどのようなものであるかを、英語力・指導力・教育力に焦点を当てて調査分析する。

3 研究方法

2013 年、2015 年に実施した 2 つの調査の分析

（1）ベテラン教師の自己分析（2013 年）

私がこれまでの 14 年間小学校英語教育で関わってきた区では、H16 年から構造改革特区となり、教科として英語が始まった。「英語学習をとおして、身近な英語を理解し、自己表現できる基礎的な話す力を養い、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身につけるとともに、言語や文化に対する興味・関心を深める」という目標を持つ「区の小学校英語科指導指針」がある。

文部科学省の学習指導要領（外国語活動編）で掲げられている目標「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」と似通ったものであるが、当初よりライティングも指導に含まれており、文字指導も無理のない範囲で行われてきた。「区の指導指針」のもとで、「各学校の教育目標」に沿って作成された 6 年間のカリキュラムで、1 学年から 6 学年まで週 1 時間 35 時間の英語の授業が実施されている。指導案を HRT が作成し、授業は担任(HRT)のみ

の授業、英語アドバイザーやALT（Assistant Language Teacher）とのHRTをT₁としたT.T.で行われている。

各学校では、長年の取り組みから、単元計画や指導案が改善されながら積み重ねられてきた。教師は、過去の指導案を参考にしつつ、受け持つクラスの指導案が作成できる環境にある。ところが、同じカリキュラムのもとで、同じ指導案で授業をしても同じような結果にならないことが、往々にして見受けられる。児童が異なることもあるが、授業観察をしていると教師の違いで随分と授業が変わってくるのがわかってきた。

そこで、本研究者が小学校で14年間一緒に授業をしてきた約30人の教師の中から、児童が集中力を失わず英語活動に参加する授業を行なってきた、尚且つ、「どんなに崩壊したクラスでも、この先生に担当してもらえば、立て直しができる」と学校現場で評価を受けてきた教師1名に、自身の英語の授業を分析してもらった。

（2）教師の意識調査（2015年）

科学研究費（挑戦的萌芽研究，平成27～29年度）助成による研究（高橋・佐藤・伊藤，課題番号：15K12920）の一環として、2015年に実施した調査したデータをもとに、分析を行う。この調査の目的の1つは、小学校で「外国語活動」を担当する上で、小学校教師が、外国語活動を指導するあたり、どのようなことに不安をもち、どのようなことができるか、また、どのようなことを必要としているかを調査することである。東京都と神奈川県の小学校637校の教師を対象に、13項目（appendix1参照）からなる質問紙調査を実施した。回収率は35.8%（228校、234名回答）であった。

4 分析

4.1 担任教師（HRT）の自己分析ノートの分析

4.1.1 教師の背景

自己分析記録を依頼したH氏は、教師歴23年、英語指導歴8年の、クラス経営のうまい教員である。クラス崩壊しかけたクラスの担任となることも度々であったが、不思議とHクラスとしてまとまってくるのである。児童はクラスのルールを守りながらも、それぞれの個性を出していた。そして、卒業した児童から訪問をよく受ける程、卒業生からも慕われている教師である。

英語指導では、HRTが指導案を作成し、英語教育アドバイザー（AD）であるJTEや英語補助教員（ALT）とのチーム・ティーチング（T.T.）でHRTがT₁を務める。4.1.2は、H氏の自己分析の記述である。

4.1.2 H氏の自己分析ノート

担任中心で行う英語科としての英語教育の実践【英語の授業と学級経営】

英語教育アドバイザー及びALTによる指導内容・指導方法についての助言のもと、担任が中心となり授業を進める。ここでは児童の様子をよく理解している担任が、学習効果をより高めるために実態に合わせた学習を展開することが大切になる。

私が英語の授業を実施するうえで、常に心掛けていたのは「いつでも だれでも どん

な内容でも」ということである。

(1) 「いつでも」

英語授業の前に、学級指導があったり、ドリル学習的な反復学習を行わせたりすると、コミュニケーションに重点を置く英語へ、気持ちを切り替えさせることが難しい。特に学級の問題を話し合った後など、重い空気が教室に残っている時は非常に悩むところである。

そこで大切にすることが、授業の導入部分である。前の時間に明るい雰囲気があれば、それを有効に活用し、すぐに友達との関わりが持てるような内容を展開する。また、暗く重たい感じであれば、個人の学習から始まり、少しずつ周囲とのコミュニケーションを図ることができるような内容とし、時間もやや多めに設定した。

英語に限らず、他教科においても授業の導入部分が、その後の展開に重要な役割を果たす。特に学習経験の少ない英語の授業については、導入によって児童の興味関心を引きつけることが、その後の展開に大いに影響してくる。そのために準備していた導入の内容を変更することもある。「この授業は歌から入っていこう。しかし、今はみんなで歌う感じではない。せっかく準備していたのに・・・」などと思うこともしばしばである。

急に導入を変化させることは厳しいところもあるが、どのような内容、方法にすれば子供たちの意識を授業に向けることができるのか、その点が大切である。導入の見極めは担任の日々の児童理解によるところが大きい。

(2) 「だれでも」

だれでもできる、だれとでもできる内容を展開していくことで、学習内容（表現）を少しずつ身に付けていく。例えば、英語で表現することが難しい児童には、ジェスチャーなどで言葉を伝えさせる。伝える側も、受け取る側も学習した表現に当てはめようと真剣に互いを見つめ、理解しようと努める。

ジェスチャーから英語が伝わった時には、答えた友達とつながりができる。普段あまり関わることの少ない友達とも交流ができ、学級経営にもよい影響を与える。

また、グループで料理のレシピを作る、物語を朗読するなどの学習では、それぞれの分担を決め、一人一人の役割を明確にする。だれもが活躍する場面を意図的に設定するとともに、互いに教え合い、助け合いながら、一つのものを作りあげていく喜びを味わわせる。

(3) 「どんな内容でも」

どんな内容であっても子供たちに身近に感じさせることが、意欲につながり、学習の成果にも結び付く。いろいろな場面を設定することはもちろん、その中に最近の話題を取り込んで授業を展開すると、学習の幅も広がっていく。

例えば、5年生で高さを表現する学習では、「富士山の高さは？」などクイズ形式で行うことに加え、富士山が世界遺産になったことを話題にする。世界遺産と高さの学習が結び付き、さらなる情報をえることができる。また、日常会話では、場面を設定した上で、まず日本語で表現したらどのように会話を始めるか考えさせ、次に英語で表現してみるようにする。生活のどの場面で、活用できる表現なのか感じることで、内容の理解に役立つ。

4年生を担当したときに、“Whose is this?”の授業を行った。「この言い方、帰りの会（ホームルームでの会）で使えないかな？」と投げかけると、ある児童が「落とし物を拾ったときに使えるね」と答えた。しばらくの間、帰りの会では、何か友達のを拾うと

“Whose is this?”という声が聞こえていたのを思い出す。時には持ち主がわかっているにもかかわらず、“Whose is this?”と表現し、楽しむ姿もあった。一番印象的であったのは“Whose is this?”と持ち上げたものが、実は自分のものであった時である。その児童もクラス中も大変和やかな空気に包まれた。

これらを意識し、試行錯誤しながら失敗を重ねて授業を行ってきた。今後の課題は次の点であるとする。

学年や単元は違っていても、英語表現はスパイラルに扱い、繰り返し行うことが大切である。そのためには、身に付けたい表現を教師側がきちんともっている必要がある。そして、コミュニケーション活動を充実させるためには、一往復で終わらない会話表現、対話の形を取り入れていくことを考えなければならない。担任が中心となって授業を進めるよさをふまえながら、担任、英語教育アドバイザー、ALT の役割を明確にして、より効果的なティームティーチングになるように工夫していくことが大切である。

4.1.3 「自己分析ノート」からの指導力、英語力、教育力

4.1.2 の記述内容は、3つのグループ（指導力、英語力、教育力）に分類できると考える。本研究では、指導力、英語力、教育力は以下のように定義した。

指導力：授業の流れを考え指導案を作成し、授業を展開していくために必要とされる直接的な授業力

英語力：生徒に英語を教えていくために必要となる教師自身の英語力（専門的力量）

教育力：考えるという作業を促せる発問力（河村，2003）や、やる気を起こさせる力、クラス経営力など教育一般に必要な力

(1) 指導力

- ・学年や単元は違っていても、英語表現はスパイラルに扱い、繰り返し行うこと
- ・コミュニケーション活動を充実させるためには、一往復で終わらない会話表現、対話の形を取り入れていくこと
- ・HRT が中心となって授業を進めるよさをふまえながら、HRT と ALT の役割を明確にして、より効果的なティームティーチングになるように工夫していくこと

(2) 英語力

- ・生徒に身に付けさせたい表現を教師側がきちんともっている必要があること

(3) 教育力

＜いつでも＞から

- ・授業の導入部分を大切にし、生徒の意識を授業に向けること
- ・導入の見極めには、日々の児童理解が大切であること

＜だれでも＞から

- ・だれでもできる、だれとでもできる内容を展開していくこと
- ・生徒同士のつながりが築けるようにすること
- ・だれもが活躍する場面を意図的に設定するとともに、互いに教え合い、助け合いながら、一つのものを作りあげていく喜びを味わわせること

<どんな内容でも>から

- ・どんな内容であっても生徒に身近に感じさせて、意欲に繋げることや学習の幅を広げていくこと

4.1.4 自己分析ノートからの分析結果

指導力については、繰り返しやスパイラルな学習になるように、一授業や一単元での学習で学習を捉えず、長いスパンでことばの学習を捉えていることや、ことばでのコミュニケーションができるようにするためにはどのような学習が必要か、その学習内容を考えている。また、HRTのT₁としての役割を明確にしようとしていることから、教師の英語の授業への積極的な取り組みが見えてきた。

英語力については、生徒に教える表現はきちんと教師が身に着けていなければならないとしている。

教育力については、教師は生徒同士のコミュニケーションを大切にしながら生徒が達成感を持てるようにする。そして、生徒自ら積極的に学習し、その学習の幅を広げることができるようにする。その配慮が大切であることが、窺えた。

4.2 教師の意識調査（2015年）

4.2.1 教師の意識調査（2015年）の概要

現職の小学校教員に対してアンケート調査を行った。アンケート送付先は全637校、回答率は35.8%（228校、234名回答）。アンケートを送付した地域は、文京区・荒川区・練馬区・八王子市・立川市・武蔵野市・三鷹市・青梅市・府中市・昭島市・調布市・町田市・小金井市・小平市・日野市・東村山市・国分寺市・国立市・福生市・狛江市・東大和市・清瀬市・東久留米市・武蔵村山市・多摩市・稲城市・羽村市・あきる野市・西東京市・瑞穂市、日の出町、檜原村、奥多摩町、東京都島嶼部、および相模原市である（Figure 1, 2）。

この調査地域は、アンケートの後行う予定であるインタビュー調査を本研究者が実施しやすい地域とした。

アンケートの質問内容（appendix 1）は多岐にわたるが、本研究では、質問項目の⑥、⑦、⑧、⑬の不安、研修内容、必要な英語力について焦点を当てて、語学教育エキスポ2016（高橋・佐藤・伊藤，2016）と第16回小学校英語教育学会（JES）宮城大会（伊藤・佐藤・高橋，2016）、全国英語教育学会第42回埼玉研究大会（伊藤・高橋・佐藤，2016）の発表内容をもとに、分析・考察していく。

質問項目⑥：外国語活動に関する研修について、今まで受けてこられた研修の中で役立ったものは何ですか。

質問項目⑦：今後はどのような研修を受けてみたいですか。また、どのような研修が必要だと思いますか。

質問項目⑧：外国語活動を担当する際、心配な点や不安に思われていることはありますか。

質問項目⑬：英語（または外国語活動）の授業を担当する上で、大学時代にどの程度英語を学ぶべきだと思いますか。

アンケートの分析方法は、1) 回答用紙の記載事項をデータ化、2) データをテキスト・マイニングで分析、3) キーワードの洗い出し、4) 教員の意見の分析、である。



Figure 1 東京都調査地域



Figure 2 神奈川県調査地域

4.2.2 アンケート調査の分析・結果

(1) 回答教師についての英語力

調査回答をしてくれた教師 234 名の中で、英語習熟度レベルについての回答は、英語検定資格 (TOEIC 等は換算値を使用) 4 級 1 名・3 級 36 名 (16%)、準 2 級以上 82 名 (35%) であった。回答コメントを読んでいくと、習熟度レベルが上の教師ほどより具体的な記述が多く見られたので、質問項目⑥、⑦、⑬については英語習熟度レベルがはっきりしている教師コメントをテキスト・マイニング分析することにする。⑧については、回答のあった全教師のコメント分析を行った。

(2) 「役立った研修」と「必要とする研修」の分析からみる必要な指導力と英語力

研修についての質問項目⑥ (役立った研修) と⑦ 「必要な研修」の教師回答コメントをテキスト・マイニング分析すると、Figure 3, Figure 4 に見られるような共起ネットワークがみられる。頻出上位のキーワードからデータを以下のような 5 つの項目に分類する。

- (a) 英語、イングリッシュ、English
- (b) 事例、実践
- (c) 会話 (聞く・話す)
- (d) 組み立て・流れ
- (e) アクティビティ (もろもろ)

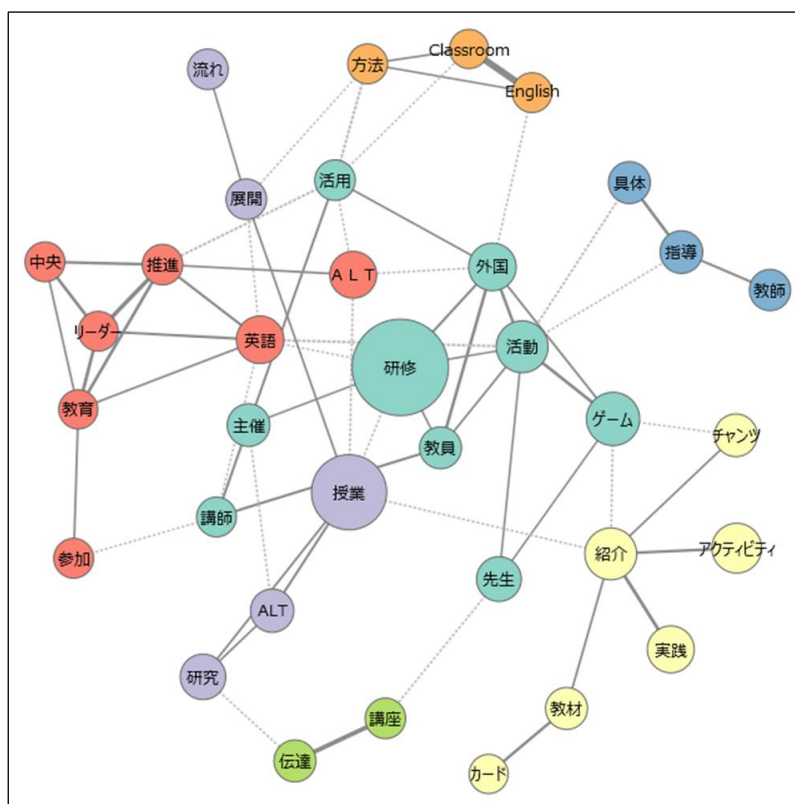


Figure 3 役立った研修共起ネットワーク

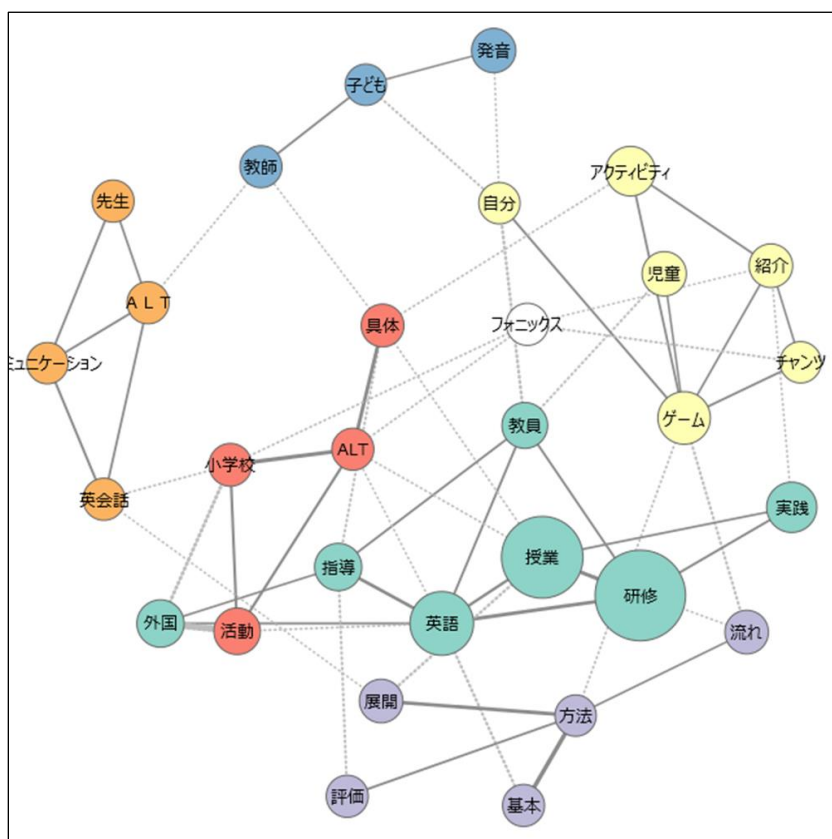


Figure 4 必要な研修共起ネットワーク

この項目にそって、『文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成 27 年度報告書』（東京学芸大学，2016）の調査項目（コアカリ）を分類し、比較してみた（Table 1, Figure 5）。

Table 1 分類項目ごとの比較

項目	コアカリキュラム		⑥役に立った研修	⑦必要な研修
	項目番号	割合	割合	割合
英語	1,2,5	13.74%	16.35%	23.90%
事例等	3,8,11	13.14%	20.75%	21.38%
会話	1,2	9.24%	2.52%	5.03%
流れ	3,5	9.09%	8.18%	10.06%
活動	5,7,18	12.71%	52.83%	40.25%

Figure 5 から、分類項目の「活動」以外は同じような傾向を示しているのがわかる。文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」（東京学芸大学，2016）での調査は、全国の教員養成大学、教育委員会、現職教師、有識者等を対象にした

大規模な調査であるが、選択式アンケート調査である。本研究グループが行った調査は調査対象校に限られるが、自由記述式調査である。自由記述では、調査する側が用意した回答以外の教師の考えを知ることができるので、少し丁寧にコメントを拾っていく。

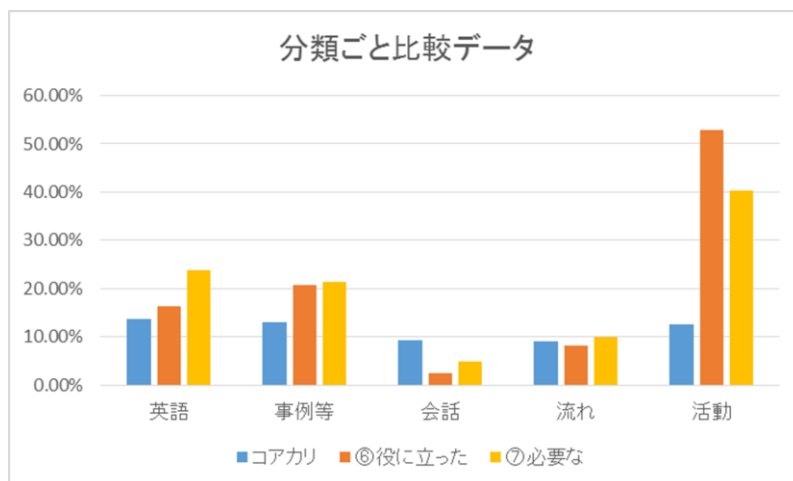


Figure 5 分類項目ごとの比較

上記の分類項目(a)－(e)は、主に英語力と指導力の2つに分けられる。英語力に関係するのは分類項目(a)・(c)、指導力に関係するのは分類項目(b)・(d)・(e)であるので、教師が必要と考えているものを、英語力と指導力、その他の3つに分けて以下に列挙する（太文字部分は、「教育力」にもかかわるもの）。

<英語力に関わるもの>

分類項目(a) より

- ・国際社会で英語が必要（重要）ということを感じること
- ・授業で使える classroom English
- ・英語のスキルを向上
- ・自分自身が英語に慣れること
- ・英語を使う必要性の感じられること

分類項目(c) より

- ・ALT との上手な会話の仕方、授業で使う英会話など
- ・英語会話
- ・ALT との連携

<指導力に関わるもの>

分類項目(b) より

- ・実際に子供たちが活動する学習内容を体験すること
- ・推進校の公開授業の参観
- ・具体的に活用できる言語活動（各学年の指導内容に即したもの）
- ・実際の授業展開の見学や検討、展開（基本）の方法を学ぶこと

分類項目(d) より

- ・授業の流れを実感・体感でき、授業の組み立てが自分で考えられるようになること
- ・授業構成など具体的な指導の仕方
- ・一連の流れを決め、単元計画を立て、展開する活動
- ・授業展開の方法の紹介（具体的なやり方）
- ・担任による 45 分の授業の組み立て
- ・英語ができない人、苦手な人でも授業ができるやり方。

分類項目(e) より

- ・読み聞かせ
- ・すぐ使えるゲームやチャンツ、歌など
- ・児童の発達段階を踏まえたアクティビティ
- ・**簡単だけど飽きないチャンツやアクティビティ**
- ・**知的な活動で単調でないアクティビティ**
- ・フォニックスの取り入れ方（音と文字の結びつけ方、アルファベットやフォニックスを取り入れるべきタイミング等）
- ・具体的なアクティビティの研修
- ・読み・書きの指導法
- ・盛り上がるより、定着が図れる活動・ゲームの考案

<その他>

- ・**子供の意識を育てる指導方法**
- ・中学校での英語教育を知り、連携していけること
- ・英語教育全体における小学校英語活動の位置づけ（いつ、何をすべきか）
- ・理論部分の意味付け
- ・評価法について

(3)「心配な点や不安に思っていること⑧)」についての分析

質問項目⑧については、英語習熟度別にしないで教師回答コメントを分析する。テキスト・マイニング分析で、Figure 3, Figure 4に見られるような共起ネットワークがみられる。

Table 2 頻出上位 5 位までの名詞

抽出語	出現回数
英語	7 1
A L T	5 9
授業	3 4
先生	2 2
発音	2 1

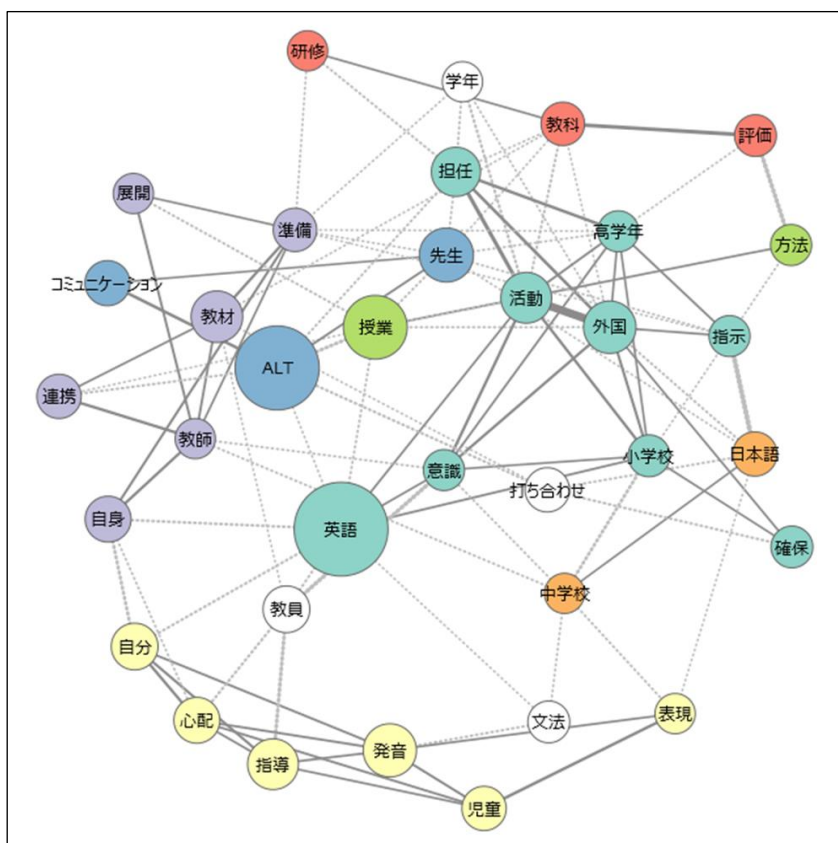


Figure 6 心配な点や不安に思っていること

頻出上位の5つの抽出語の観点から、教師のコメントを分析すると、「ALTとの打ち合わせ、授業内でのやり取り、発音の不安、文法などの英語力」に対して大きな不安を教師は抱えていることがわかった。

- (4) 「英語（または外国語活動）の授業を担当する上で、大学時代にどの程度英語を学べべき^⑬」について

コメントに多く見られた以下6つの項目でデータを分類する。

- (a) 指導（指導法）
- (b) 会話（日常会話、コミュニケーションが取れる程度も含む）
- (c) 経験（ネイティブスピーカーとのやり取り、留学等）
- (d) 基礎（発音を含む、中学校英語程度）
- (e) クラスルーム・イングリッシュ
- (f) レベル（どの程度の英語力を身につければよいか）

Table 3 教員養成についての習熟度別意識差

項目	3級以下		準2級以上	
	人数	割合	人数	割合
指導	12	32.43%	19	23.17%
会話	16	43.24%	32	39.02%
経験	2	5.41%	19	23.17%
基礎	5	13.51%	12	14.63%
クラスルーム	5	13.51%	6	7.32%
レベル	2	5.41%	5	6.10%

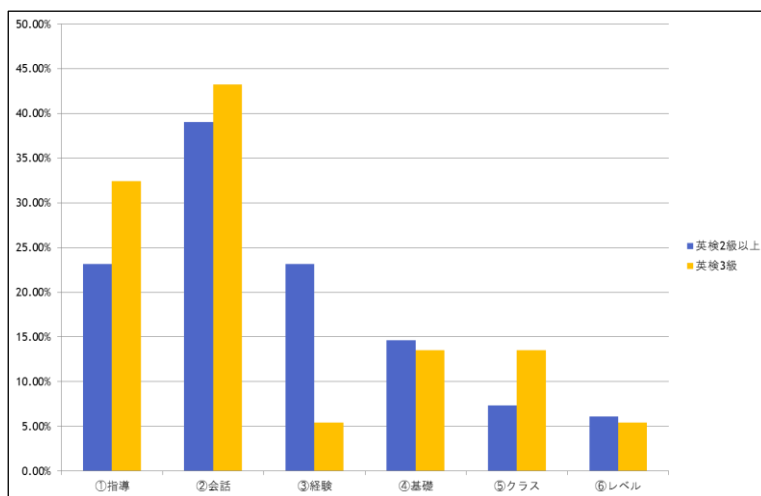


Figure 7 教員養成についての習熟度別意識差

必要だと考えるものが、習熟度によって違うことや、習熟度レベルが上がるにつれてより具体的になっているので、習熟度別に英語力についてのコメントを見ていく。

＜英語力に関係するもの＞

英検 4 級レベル

- ・小学校であれば、中学卒業レベルの英語で十分である。Word は多く身につけていればいるほどよい。

英検 3 級レベル

- ・クラスルーム・イングリッシュ
- ・難しい単語や会話、文法よりも日常の簡単な会話、ジェスチャーも使いながら「伝える」や「コミュニケーション」をメインにすること
- ・外国の方と直接コミュニケーションをとる機会（留学、旅行など）
- ・単語力は大学入試レベルで十分
- ・簡単な会話ならできるはずなので、中学英語程度が確実に身に付けること

英検準2級レベル以上

- ・正しい文法や、子どもたちが楽しんで学習できる活動の引き出しとアイデアをたくさん学んでおくこと。ただ、「**教えこみ方式**」では子どもたちが give up するので、**そうでない出し方と表現方法**
- ・classroom English、ALT の先生との会話に困らない程度の英会話
- ・なるべくネイティブな発音で話せること
- ・海外の方と会話するのが楽しいと思えること
- ・小学校で使う英語はそれほど難しいものではない（使う必要がない）ので、中学3年くらいの力があればよい。それより、いかに人前で話せるか、頭の中で言葉を英語化して話せるか、アウトプットできるか、そのような力
- ・教室で使う最小限の単語等を理解していればよいと思います。「**英語力がある＝英語の授業が上手いではない**」と思うから。（徐々に学ぶ必要は有り）
- ・読むこと：英字新聞の記事が辞書を使い読める（理解できる）こと
- ・聞く・話す：中学校レベルの文法を十分に使いこなせる程度の発話力、少しゆっくり話してもらえたと聞き取れる程度の聞き取り力

<指導力に関係しているもの>

英検3級レベル

- ・小学校で外国語活動が増えるのであれば、教職課程の中に、実際こうするといい授業ができるという内容のものを学ぶこと。程度はわからない。

英検3級、準2級以上

- ・単元計画の作り方

4.2.3 意識度調査分析結果

4つの質問項目分析から、求められる英語力については、正しい発音・文法、日常会話力、クラスルーム・イングリッシュを使えるようになること、外国人とやり取りの体験という回答が多い。指導に関しては、小学校における英語の指導法（授業の組み立て方、実際にアクティビティを考え実演することを含む）を身に付けることなどが、回答として多くあげていた。

習熟度別にみると、英検4・3級レベル群では、英語に関しては、「簡単な会話・「日常会話」があがっており、指導に関しては、外国語活動を行うために直接役に立つものや、英語力が低くても授業が行えるような指導法を求めている。英検準2級レベル以上の教師群は、経験（留学等）、楽しい言語使用の経験、話すことの抵抗感が下がることが必要だと、より具体的に言及していた。指導に関しては、広い視野から指導法に言及していたが、英検準2級以上を持っていても、外国語活動の指導は難しいということが推察される。

2つの習熟度別群で共通して強く求められていたのは、基礎的な英語力をつけながら、例えば、子どもが自ら発話したくなるような指導力も身につけていく必要性や、英語の運用力、会話力の向上であった。

質問項目⑧「心配な点や不安」・⑬「大学で育つとよいと考える力」では、単元作成や望ましい授業構成など指導力に関わるものもあったが、英語力に関するものが圧倒的に多く

見られた。

「教育力」に関するものと考えられるコメント表現として、4つの質問項目の分析を通して、「簡単だけど飽きない」、「知的な活動で単調でない」、「子供の意識を育てる」、「子どもたちが楽しんで学習できる」、「教えこみ方式では子どもたちが give up するので、そうでない出し方と表現方法」、「英語の授業が上手＝英語力がないではない」というコメント(4.2.2太字部分)があった。

5 考察

英語習熟度レベルが準2級以上であっても、英語が使えると思っていない教師がほとんどであった。生徒に教える表現はきちんと教師が身に着けている必要があるとする教師がいる一方で、多くの教師が、自分自身の英語力向上のためには、発音や文法に大きな不安を持ちながらも、実際に英語を使ってコミュニケーションをとってみる楽しい体験を望んでいた。つまり、英語についての学習は知識を得るだけでなく、英語運用の成功体験を望んでいるのである。

指導力についても、繰り返しやスパイラルな学習になるように、一授業や一単元での学習で学習を捉えず、長いスパンでことばの学習を捉えていることや、ことばでのコミュニケーションができるようにするためにはどのような学習が必要か、その学習内容を考えることや、HRTがT₁として英語の授業へ積極的に取り組む姿が見える一方で、その逆に、単元作成や英語の授業展開がわからない教師が少なからずいる。

教育力については、「外国語活動を指導するにあたってどのようなことが必要か」という意識調査からは直接的なコメントはなかったが、「簡単だけど飽きない」、「知的な活動で単調でない」、「子供の意識を育てる」、「子どもたちが楽しんで学習できる」、「教えこみ方式では子どもたちが give up するので、そうでない出し方と表現方法」、「英語の授業が上手＝英語力がないではない」という表現が教師コメントの中に散見された。4.1.3と共通している表現である。

生徒の理解の大切さ(本多, 2011 p. 7)は英語に限らず、どの教科にも言えることであるが、教師の自己分析ノート4.1.3にも挙げている。そして、教師は生徒同士のコミュニケーションを大切にしながら生徒が達成感を持てるようにし、生徒自ら積極的に学習し、その学習の幅を持たせ、学習を深めることができるように配慮していることが大切であることを挙げている。生徒たちの学びは、まさに、アクティブ・ラーニングであろう。昨今アクティブ・ラーニング、アクティブ・ラーニング型授業を文科省が提唱しているが、「教育力」のある教師は、それを実践するスキルを既に持っていると考えられる。

英語や外国語活動を指導する教師の「英語力」や「指導力」の養成や向上が強く望まれている(Benesse 教育研究開発センター (2010), 東京都教育委員会 (2012)、文部科学省 (2013)、東京学芸大学 (2016)) ののであるが、生徒が目を輝かせて生き生きと学習するためには、「教育力」が必要不可欠な力ではないだろうか。

7 課題

文部科学省 (2013) が「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表、2020

年をめぐり小学校中学年では活動型の英語教育が学級担任を中心に指導され、高学年では教科型の英語教育が専科教員を活用しながら「英語指導力を備えた学級担任」によって行われることになった。そして、英語力の高い小学校教員を募集する自治体も出てきた（東京都、2016）。しかしながら、この調査でも窺えるように、指導する教員の英語力も指導力もまちまちであり、英語力や指導力の向上は喫緊の課題であろう。教師自身の課題というよりも、教員研修や教員養成をする側で取り組まなければならない課題である。

今回の調査で、小学校教員に必要だと思われる英語力は、中学校英語くらいと回答する教員が多いのであるが、中学校英語を100%マスターするということなのか、70%身に付けていればよいのか、どの程度身につけていればよいかがはっきりしていない。また、生徒に教える内容はきちんと教師が身に付けておかなければならないとしても、生徒に教える内容が今の小学校英語では明示されていない。小学校英語は、現在まだ教科でなく外国語活動として5、6年生で必修であり、教科書はない状況である。*Hi, friends! 1, 2*が文科省から小学校に配布されているが、この教材は補助教材であり、各小学校で使用しても使用しなくてもよいという位置づけである。そのため、学習内容は学校によって異なり、明確な学習内容は示されておらず、そのことから、教師は何を身につけなければならないかが、不明瞭になってしまっている。英語の何をどの程度身につけなければならないかを明確にする必要がある。

「英語力」、「指導力」については、具体的にどのような力が必要であるか多く挙げることができた。「教育力」についても、教師自己分析ノートから具体的にわかってきたことは多い。が、今回、自己分析を行った教師は全科を受け持つ小学校教師である。様々な校種の学校、異なる教科での分析事例を増やし、生徒が生き生きと学習を深めていくためには教師にどのような力が具体的に必要であるか、今後とも取り組んでいきたい。

謝辞

今回、教師に求められる英語力・指導力・教育力についての分析において、山根宏之氏（江戸川区立二之江第三小学校 副校長）には、多大な協力をして頂いた。ここに深く感謝の意を表する。

参考文献

- ・Benesse 教育研究開発センター（2010）．「第2回小学校英語に関する基本調査（教員調査）」．2016年9月27日．
<http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=3179>
- ・本田勝久・柏木賀津子・松沢伸二・佐藤臨太郎（2015）．「小学校英語―教員をどう養成するか」．言語教育エキスポ2015．2015年3月15日．於早稲田大学
- ・本多敏幸（2011）．『若手英語教師のためのよい授業をつくる30章』．教育出版．
- ・伊藤摂子・佐藤玲子・高橋和子（2016）．「小学校教員が受けた＜役立つ＞研修と、彼らが、＜求めている＞研修について―現場教員への質問調査分析から―」．第16回小学校英語教育学会(JES)宮城大会．2016年7月24日．於宮城教育大学
- ・伊藤摂子・高橋和子・佐藤玲子（2016）．「小学校教員の「外国語活動」指導に対する不

安感とは何か―大学生の英語テスト結果から教員を探る―」. JASELE 全国英語教育学会
第 42 回埼玉研究大会. 2017 年 21 日. 於獨協大学

- ・金森強 (2014). 『『全人教育』としての小学校英語教育』. 『英語教育』第 63 巻第 5 号 : pp. 10-11.
- ・河村茂雄 (2003). 『教師力 教師として今を生きるヒント』上巻, 下巻. 誠信書房.
- ・松川禮子 (2001). 「小学校英語教員養成のためのカリキュラム試案」. 『英語教育』第 50 巻第 8 号 : pp. 54-58.
- ・文部科学省 (2013). 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」. 2016 年 9 月 27 日
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf
- ・文部科学省 (2016). 「小学校における外国語教育の充実に向けた取組 (カリキュラム、教材、指導体制の強化)」. 2016 年 9 月 27 日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/074/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/03/03/1367634_5.pdf
- ・仲島正教 (2006). 『若手教師が伸びる「10」のすすめ 教師力を磨く』. 大修館書店.
- ・齋藤孝 (2007). 『教育力』. 岩波書店.
- ・白畑知彦 (2008). 「大学における小学校英語教員養成―実態とこれからの課題・要望」. 『英語教育』第 57 巻第 6 号 : pp. 20-22.
- ・東京学芸大学 (2016) 『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業』. 2016 年 9 月 27 日
http://www.ugakugei.ac.jp/~estudy/wpcontent/uploads/2016/02/symposium_report_all_c.pdf
- ・東京学芸大学 (2016) 『文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成 27 年度報告書』. 2016 年 9 月 27 日
<http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/wp-content/uploads/2016/03/h27all.pdf>
- ・東京都教育委員会 (2012). 「小学校外国語活動の充実に向けて一適切な外国語活動の評価についての行内研修を進めていくために」. 2016 年 9 月 27 日.
<http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/shidou/manabiouen/gaikokugo/jujitsu.pdf>
- ・高橋和子・佐藤玲子・伊藤撰子 (2016) 「小学校教員から見た大学教員養成のあり方」 語学教育エキスポ 2016 2016 年 3 月 6 日 於早稲田大学
- ・卯城祐司 (2014). 「小学校英語を担う指導者養成と学び続ける教師の支援」. 『英語教育』第 63 巻第 5 号 : pp. 30-31

付録 appendix

1 小学校教員への意識調査 (アンケート) 項目

①教材 (テキストや指導案集等) について伺います。ご担当の授業で使用している (使用したことがある) 教材にチェックを入れ、どのくらいの頻度で使っているのか (いたのか) 教えてください。

②英語（または外国語活動）の授業で使用経験のある教具について伺います。以下の中から、あなたが使用している（使用していた）教具にチェックを入れ、どのくらいの頻度で使用しているのか（使用していたのか）教えてください。

③英語（または外国語活動）の授業で実施経験のあるアクティビティについて伺います。以下の中から、あなたが取り入れている（取り入れていた）アクティビティにチェックを入れ、どのくらいの頻度で実施しているのか（実施していたのか）教えてください。

④学習目標の表現（たとえば“I want to be a teacher.”）をどのように導入し、指導を展開していますか。大まかな流れを教えてください。

⑤外国語活動の授業では、どのようなことに配慮して授業を組み立てるべきだとお考えですか。

⑥外国語活動に関する研修について、今まで受けてこられた研修の中で役立ったものは何ですか。

⑦今後はどのような研修を受けてみたいですか。また、どのような研修が必要だと思いますか。

⑧外国語活動を担当する際、心配な点や不安に思われていることはありますか。自由にご記入下さい。

⑨教師歴についてお伺いします。あてはまる箇所に数字（年数）を記入して下さい。

⑩英語（小学校では外国語活動）の担当学年についてお伺いします。

⑪外部検定試験（英検、TOEIC 等）を受けた経験はありますか。受験経験のあるテストにチェックを入れ、お差し支えなければ所持資格、スコアを教えてください。

⑫あなたは大学時代、どのような方法で英語を勉強しましたか？以下の該当する項目にチェックを入れて下さい。

⑬英語（または外国語活動）の授業を担当する上で、大学時代にどの程度英語を学ぶべきだと思いますか。自由にご記入下さい。